特集「多様な社会的責任を担うコンピュータセキュリティ技術」の編集にあたって

松 浦 幹 太†

本年4月の個人情報保護法完全施行をきっかけとして，同法関連の書籍が売り上げを伸ばしているようである．プライバシーマークやISMS認証などの情報セキュリティ関連の認証取得を目指す企業も増えているようだ．すなわち，企業その他各種法人が，情報セキュリティに関わる活動を社会的責任の観点からとらえなおしつつある．まだまだ十分ではないとはいえ，そして必ずしも自発的とは限らないとはいえ，情報セキュリティ技術を利用する側に社会的責任という考え方が広まる傾向にあるのだ．そのような時代に，情報セキュリティ技術を研究し開発するコミュニティが果たすべき社会的責任は，当然のことながらますます重くなっているといえよう．

コンピュータセキュリティ研究会（CSEC）は，情報セキュリティに関わる研究を扱うコミュニティとしてその研究対象の広範さとアプローチの多様さに1つの特徴があり，年に1回開催しているコンピュータセキュリティシンポジウム（CSS）では，セッション名のリストに毎年必ずといってよいほど新しいトレンドが加味され，しかもそれがたいてい発展的な形で翌年以降に継承されている．近年は全体の規模も急拡大しており，本特集への投稿を積極的に呼びかけたCSS2004では，参加者245名，発表論文140件（その前年は113件）にまでなった．この事実に研究分野の発展を感じ取るのは，関係者にとって幸せなことかもしれない．しかし，ある種の満足感のようなものが油断につながって安全・安心の基礎となるべき評価の軽視がもたらされると，もはや健全な発展とはいえなくなってしまう．これは，脅威といってもよい．

脅威に対して早めに適切な備えをすることは，コンピュータセキュリティの基本である．そこで，本特集では，質の高い評価をともなった論文を広く募集することとした．しかも，評価の方法論としては，暗号理論だけでなく実証実験によるアプローチや社会科学も含めて，幅広いスペクトラムを対象とした．この姿勢を示すことこそが，現在，このコミュニティが社会的責任を自覚していることの証になると信ずればこそである．

しかし一方では，過度に厳しい印象を与えかねない文面の論文募集が不適切に投稿を抑制すると，査読という重要な評価と研究改善の機構が阻害されるのではないかという懸念もあった．正直，そのような逆効果が出ぬよう念じつつ，投稿期間を過ごした．幸い，念ずれば通じたのか，本特集にはまさに多様な論文が65件投稿された．取り下げ3件を除く62件のうち29件が採択され，採択率（47%）は予想（55%）を下回ったものの前年（42%）を上回り，採択件数は予想どおりとなった．安全性評価・解析を主題とした論文が4件採択されたことは，1つの特徴といってよいだろう．

本特集の論文募集趣旨が査読編集作業に大きな負荷を生じさせたことは，いうまでもない．にもかかわらずこうして出版にこぎつけることができたのは，査読者や編集委員，そして学会関係者の皆様方のご尽力のおかげであり，編集長として感謝の念でいっぱいである．とりわけ，朴美娘編集委員には，運営・進行に関わる作業を多数スムースにこなしていただいた．心から感謝申しあげたい．

「多様な社会的責任を担うコンピュータセキュリティ技術」特集号編集委員会

- 編集長
  松浦幹太（東京大）
- 編集委員（五十音順）
  岩村恵市（キャノン），岡本栄司（筑波大），菊池浩明（東海大），櫻井幸一（九大），佐々木良一（東京電機大），下川俊彦（九州産業大），新保　淳（東芝），田中　清（信州大），田中俊昭（KDDI研究所），寺田真敏（日立），西垣正勝（静岡大），沼尾雅之（日本IBM），朴　美娘（三菱電機），村山優子（岩手県立大），盛合志帆（ソニーCE），渡辺健次（佐賀大）

† 東京大学